

聖書：士師記 18：1～31

説教題：偽りの宗教

日時：2015年1月11日

この章でダン族は自分たちの相続地を求めて北へ移動しようとしています。ヨシュア記 19 章に書いてありますが、ダン族にももちろん約束の地は割り当てられていました。しかし彼らは主に信頼して割り当て地を自分のものにするというわざに進みませんでした。士師記 1 章 34 節：「エモリ人はダン族を山地のほうに圧迫した。エモリ人は、なにせ、彼らの谷に降りて来ることを許さなかった。」そこでダン族は 2 節で、彼らの諸氏族全体の内から 5 人の者、ツオルアとエシュタオルからの勇士たちを派遣して、土地を偵察し、調べることになりました。そして言います。「行って、あの地を調べなさい。」まるでモーセの時代に約束の地を探るためにカデシュ・バルネアから 12 人の斥候を派遣したあの時を彷彿とさせる雰囲気です。

5 人の代表は旅をしてエフライムの山地のミカの家に来ます。そして彼の家で祭司をしていたレビ人に気づき、彼に質問します。「だれがあなたをここに連れて来たのですか。ここで何をしていますのですか。ここに何の用事があるのですか。」これは鋭い質問です。なぜならレビ人がここにとどまっているのは不自然だからです。それに対してレビ人は、かくかくしかじかのことがあり、私はミカの家の宮の祭司をしています、と言います。すると 5 人のダン人は彼を咎めるどころか、私たちがこれからしようとするのが主の御心かどうか伺って下さいと頼みます。すると祭司は 6 節で言います。「安心して行きなさい。あなたがたのしている旅は、主が認めておられます。」

果たしてこれは信じて良い言葉なのでしょうか。前章で見たように、このレビ人は決して主が認めたもう祭司ではありません。祭司はアロンの家系の者のみと御言葉で規定されているのに、このレビ人は頼まれて勝手に祭司になりました。また彼が仕えているプライベートな宮には彫像と銅像が置かれていて、勝手に作ったエポデとテラフィムも置かれていました。彼は主の召しによってではなく、生活を保障してくれそうな仕事があったからここで働いている人です。そんな彼は、ただ人々が喜ぶような言葉を口にただけなのではないのでしょうか。「主が認めておられます」などという言葉を手軽に持ち出しながら…。

ダン族はこれによって気を良くして北方のライシュに着きます。その町は非常に素晴らしい状態でした。住民は安らかに住んでおり、足りないものは何もありません。誰とも交渉がなく、独立して住んでいるので、攻め上っても誰も助けに来ないでしょう。彼らは喜び勇んで帰って報告します。9節と10節：「そこで、彼らは言った。『さあ、彼らのところへ攻め上ろう。私たちはその土地を見たが、実に、すばらしい。あなたがたはためらっている。ぐずぐずせずに進んで行って、あの地を占領しよう。あなたがたが行くときは、安心しきっている民のところに行けるのだ。しかもその地は広々としている。神はそれをあなたがたの手に渡しておられる。その場所には、地にあるもので足りないものは何もない。』」これも約束の地を探った斥候たちの報告に似ています。民数記13章に記されていますが、あの時、ヨシュアとカレブは、主によって必ずそれができるから私たちは是非とも上って行ってそこを占領しようと言いました。しかしこれは本当にヨシュアとカレブを映し出す信仰的発言なのでしょうか。結論を先に申し上げれば、一言で言ってこれはパロディです。表面的には似ていますが、下手な真似なのです。

以前のケースでは、主が約束の地に前進すべきことをはっきり示しておられました。しかし今回、ダン族にこの土地に進むようにとの主からの指示はありません。彼らのすべきことはむしろ、自分たちに割り当てられた地を最後まで獲得することだったのではないのでしょうか。主に信頼してそのわざに当たることだったのではないのでしょうか。なのに彼らは自分たちにも占領できそうな好ましい土地を見つけて、この地を「主が与えておられる」などと言っている。

果たして私たちがこの場にいたらどうでしょう。9～10節の代表者たちの報告を聞いて嬉しくなり、「そうだ！それこそ主が与えておられる土地だ！ヨシュアやカレブのように前進しよう！」と声をあげてしまう可能性はないのでしょうか。ミカの家の子が「主が認めておられます」と保証してくれたという話も聞けば、なおさらです。しかし一見信仰的に思われる発言や行動の裏に、実は自分の欲望が潜んでいるということはないかと私たちは考えてみなければなりません。「主の御心に違いない」と言いながら、本当は自分のしたいことを正当化しようとしているだけではないのか、と。本当にそれは「主の」御心なのでしょう。主がはっきり示しているみことばと合致するものでしょうか。みことばにこそ聞き従うという私の信仰の姿勢の現われとして、私はそのことを主張しているのでしょうか。

ダン族が主への信仰によって行動しているわけでないことは、続く場面に明らかになります。14 節以降で彼らはまずミカの家から彫像や铸像、エポデやテラフィムを盗みます。十戒の第 8 戒、「盗んではならない」を堂々と破っています。主の御心に従おうとする人がどうしてこんなことをするでしょう。また彼らはミカを家の祭司に見つかり、彼を買収しようとします。19 節：「彼らは祭司に言った。『黙っていてください。あなたの手を口に当てて、私たちといっしょに来て、私たちのために父となり、また祭司となってください。あなたはひとりの家の祭司になると、イスラエルで部族または氏族の祭司になると、どちらが良いですか。』」 これを聞いて「祭司の心はずんだ」と 20 節にあります。ミカの家で働くより、もっと良い生活ができる！こんな姿を見れば、先の 6 節の彼の言葉は信頼に値するかどうか分かって来ます。そして被害を受けたミカが追いかけて来ると、ダン族はとぼけた上で 25 節で言います。「あなたの声は私たちの中で聞こえないようにせよ。でなければ、気の荒い連中があなたがたに撃ちかかろう。あなたは、自分のいのちも、家族のいのちも失おう。」 ものすごく脅迫的な言葉です。これが主の御心を求めている人たちの発言でしょうか。こうしてダン族はライシュを襲い、その町を火で焼き、そこにダンという自分たちの名前をつけます。罪のない町に残虐なことをしてこれに乗っ取ったのです。

果たしてこのような士師記 18 章を読むことにどんな意義があるのでしょうか。ダン族はかなり身勝手に振る舞ったにもかかわらず、この章を見る限り、うまく行っています。色々あったけれども、結局主はこれを良しとされたということなのでしょう。注目すべきは 30 節に「国の捕囚の日まで」という不吉な言葉があることです。この「国の捕囚の日」とはいつのことでしょう。学者の間でも色々な意見がありますが、最も有力な見方はアッシリヤ捕囚を指すというものです。イスラエルの南北分裂後、北イスラエルの王ヤロブアムは金の子牛を作り、一つをベテルに、もう一つをダンに安置したと I 列王記 12 章 29 節に記されています。ヤロブアムがダンをその一つの場所として選んだのは、この士師記 18 章に経緯が記されている通り、ダンにすでにこのような彫像が立てられていたことに基づいていたのかもしれませんが。そうだとすると、この時、ダン族のしたことが、後の本格的な偶像礼拝の基礎を据えることにつながり、それが将来の捕囚のさばきを引き起こしたということになります。あるいはこの捕囚がアッシリヤ捕囚でないにしても、ダン族のしたことが何らかの意味で「捕囚」と表現される後の日の災いにつながったということ、

この士師記 18 章 30 節は暗示しているのではないのでしょうか。いずれにしても、一見うまく行ったこの出来事を主は決して良しとしておられないことを、この節は示していると思われまます。

最後の 31 節も、この章のポイントを明らかにしています。「こうして、神の宮がシロにあった間中、彼らはミカの造った彫像を自分たちのために立てた。」ここに士師記の著者は、「正しい宗教」と「偽りの宗教」を対比させています。本来イスラエル人は、神の御言葉に従ってシロに行って礼拝すべきでした。ところがダン族は勝手に自分たちの町に彫像を立てました。これは正当な神の宮シロに挑戦するものです。御言葉に基づかず、自分の目に正しいと見えることを行なう偽りの宗教の象徴です。こうして神から離れて、自分のしたいことをする「偽りの宗教」がやがての捕囚をもたらした。いや士師記の最初の読者たちはこの捕囚が何であるかを知っていたわけですから、まさにその災いがこのようにしてイスラエルに降りかかったということを感じさせられた。御言葉から離れて、好き勝手に生きる偶像礼拝の生活に結局良いことは起こらない。士師記の著者はこうして、シロに象徴される正しい信仰に立ち返るようにと読む者たちを促しているのではないのでしょうか。

今日の私たちはどうでしょう。私たちは明白な偶像礼拝はしていないかもしれませんが。しかしこの章で見た人々のように、御言葉をそっちのけにして自分の目に正しいと見えることを優先して行なう生活を送っていることはないのでしょうか。自分がしたいことを正当化するために、色々な理屈を持って来て「これは主の導きだ」と言っていることはないのでしょうか。ダン族の人々が、偽りの祭司から「安心して行きなさい。主が認めておられます。」という言葉をもって気を良くしてその道に進んだように、あの先生がこう言ってくれたからとか、この友だちがこう言ってくれたから、ということを利用して、だからこの道に行くのは良いのだと主張していることはないのでしょうか。そして良い結果がたくさん得られたから、これは神の御心だ！神の祝福だ！と喜んでいることはないのでしょうか。

しかし前の章と同じく、みことばを脇に押しやっても、生活がうまく行くことはあるのです。今日の章で祭司は前よりもさらに条件の良い働き口にありつくことができました。ダン族も素晴らしい土地に住むことができました。彼らはみな、願ってもない祝福を得たのではないのでしょうか。しかしそれがどんなに楽しく、思い通りの生活であったとしても、

それは主からの祝福ではないということをこの箇所は語っている。それはやがて捕囚という悲しい出来事へつながるのです。

士師記の著者はこうして御言葉に従う正しい信仰に立ち帰るようにと訴えています。私たちはダンではなく、シロに行かなくてはならない。自分の目に良いと見えることを行なう生活ではなく、主の目に良いことを行う信仰生活へ進まなければならない。前回も引用した申命記の言葉を2つお読みして終わります。6章18節：「主が正しい、また良いと見られることをしなさい。そうすれば、あなたは幸せになり、主があなたの先祖たちに誓われたあの良い地を所有することができる。」 12章28節：「気をつけて、わたしが命じるこれらすべてのことばに聞き従いなさい。それは、あなたの神、主が良いと見、正しいと見られることをあなたがたが行ない、あなたも後の子孫も永久にしあわせになるためである。」